小学校の事例 東区 栄小学校

学校でクワガタやカブトムシを飼育。街から消えた昆虫を、地域に取り戻す。

保護者とともに特色ある学校づくり。
生態系の中で「昆虫」との共存を目指す環境づくりに取組むことで
自然への理解を深めていく。

はじまり 街から消えた昆虫を学校で飼育

本校の近くには、かつての原生林を残しつつ整備した公園がある。しかし、もともと生息していた昆虫が減ってきたため、子供たちが観察する機会も同様に減少してきた。

そのような中で、保護者がクワガタやカブトムシを採集して学校へ持ってきてくれたことから、子供たちに昆虫への関心が広がった。そこで本校は、保護者にアドバイスやサポートを依頼したうえで、札幌市が進めている「特色ある学校づくり事業」に申請。承認を受けて、自然や命への理解を深め、生態系の中で『昆虫』との共存を目指す活動を、平成22年度から開始した。

「街から消えた昆虫を取り戻そう」という考えのもと、まず昆虫の飼育を行い、増えた昆虫を地域の幼稚園や学校に贈り、それぞれの園庭や校庭、公園に放し、より自然な状態で繁殖できる地域の環境をつくっていくことが目標である。

昆虫アイランドのパネルを掲示

内容 在来種の昆虫を捕獲し産卵させ ふ化を待つ

保護者のアドバイスと協力を得て、使用されていなかった飼育小屋を昆虫が産卵し、ふ化する場所として整えた。秋にクワガタ150頭、カブトムシ300頭の幼虫を入手。クワガタは培養土、カブトムシはオオヒラタケの菌床を入れた保存ケースに入れ、ふ化するのを待っている。

春までに2～3回、エサの交換を行う予定である。幼虫の食べる量によって減り方が変わるため、ときどきようすを見る必要がある。

培養土とクワガタの幼虫

平成22年は取組み始めたばかりなので教員が主体となって行っているが、1月の第三土曜日には4～6年の希望者を募ってエサの交換作業を行った。

ちなみに、捕獲する昆虫の場所は道内であり、在来種のみを繁殖させ、現在の生態系を壊すことのないよう配慮している。

効果 生物に親しみ 生息環境を意識するように

虫にとって住みよい環境について考える中で、かつての原生林の存在や、それを取り戻すことの意義についての理解を深めている。

昆虫の飼育を通じ、児童の命や自然に対する気持ち・意識が変わってきた。最初は成虫を観察し育てていく中で、夏が過ぎるとほとんどが寒さなどで弱って死んでしまうことを知る。死骸を見つけた子どもは「先生、土に埋めてあげよう」と発言することが多い。こうした経験から様々な感情を知り、命の大切さを実感しているようである。

「生物」は必ず環境に関わっているということを子供たちに意識させ、昆虫をただ「獲る」のではなく「育てていく」こと、そして、生き物と自分たちはつながっているということを学んでほしいと考えている。

幼虫のエサを交換

課題 取組の充実 費用等 継続に向けて検討

まず自校で繁殖させたクワガタやカブトムシを地域の教育施設（小学校や幼稚園等）や子供たちにプレゼントしていく。

将来的には学校に隣接する原生林の公園に北海道在来の大型昆虫を自然繁殖させ、その観察会を開催するなどして、地域と一体となった保護・繁殖の展開を目指していきたい。

また、自然の状態にある昆虫を観察することで、自然に親しみ、自然を慈しみ保護していく態度を育てていくことが今後の課題である。

オオヒラタケの菌床とカブトムシの幼虫

広げよう つなげよう 環境学習の輪

実施校からメッセージ

環境学習は、各学校や地域に合ったものを取り入れ、活動に関するアドバイザーが見つけられるとスムーズです。ただ、アドバイザーとなっている保護者の協力が、児童の卒業で得られない場合もありますので、長く活動を行っていくためには、継続の方法や引継などについて検討する必要があると思います。